



# そよかぜ

2017年7月 Vol.22

夏号

## 病院の理念

私たちは  
「ゆるぎない信頼、心からの満足」  
をしていただける病院を目指します。  
人としての尊厳を重視した上で専門医療(国  
の定める政策医療)に誇りをもち、地域の  
皆様が安心して心身ともに癒される医療を  
受けていただけるよう全力を尽くします。

## CONTENTS

新任のご挨拶	.....2
新任のご挨拶	.....3
職場紹介-1階病棟	.....4
都窪胸部疾患・地域連携懇話会を開催して	.....5
はやしまふれあい講座に参加して	.....5
絵画の寄贈について	.....5
えびす・だいごく100kmマラソン奮闘記	.....6





## 新任のご挨拶

院長 谷 本 安

宗田 良 前院長（現名誉院長）の後任として、本年4月1日から院長に就任致しました。

当院は結核の療養所としてスタートし、時代のニーズに応じた変貌を遂げながら、結核を含む呼吸器疾患、神経難病、重症心身障害児・者、アレルギー等の専門医療を展開し、2004年から独立行政法人国立病院機構南岡山医療センターとなり現在に至っています。

私は1994年から2年間、内科医師として当院に一度勤務した後に、2013年8月まで岡山大学病院呼吸器・アレルギー内科のスタッフとして勤め、同年9月から臨床研究部長として赴任しました。主に喘息やCOPD、間質性肺炎の診療や臨床研究に従事し、2016年からは統括診療部長として全てのリニューアルを終えた新病院の管理・運営にも携わってまいりました。昨年9月には1階病棟を地域包括ケア病棟に転換し、2025年に向けての地域包括ケアシステムの構築を柱とした医療変革の波に乗り遅れないように、在宅復帰に向けた医療ケアやリハビリなどを中心に在宅復帰支援にも力を入れています。

今後の展望ですが、結核・呼吸器疾患や神経難病、重症心身障害児・者やアレルギー等の当院が得意とする分野の専門医療を維持し、さらに特色あるものへ発展させたいと考えています。また、早島町ならびに近隣の地域の方々が当院に求めている医療をしっかりと把握し、提供してまいりたいと思います。病気や障害を持った人達や地域の皆様から、「寄り添い支える」病院として信頼と満足をいただけるよう、職員一同、日々取組んでまいりますので、どうかよろしくごお願い申し上げます。



# 新任のご挨拶



特命副院長・重症心身障害児(者)センター長  
吉 永 治 美

新年度が始まり、新院長も誕生し、南岡山医療センター一同新しい気持ちでスタートしました。私自身も、今年1月から通園施設つくし園、つくし病棟を統合した重症心身障害児(者)センターのセンター長として就任致しました。

私は岡山大学病院小児神経科で准教授としての13年を含めて30年以上務めていましたので、ここには若い時代に主治医としてお会いした患者さんもたくさんいらっしゃいます。

また長い間てんかん診療に関わっており、てんかんのスペシャリストとして岡山大学病院てんかんセンターの設立に奔走し、県内のてんかん医療連携構築に邁進して参りました。ここにもたくさんの方のてんかんを持つ患者さんが入院、外来にいらっしゃいます。てんかん診療は未だ苦手意識をもたれている医師、看護師さんなどの医療関係者が多いようですが、せっかく赴任しましたので、岡山と倉敷の中間のこの病院で、さらにてんかん医療にも貢献できるように教育、診療活動に頑張りたいと思っています。近隣の皆様もぜひ御気軽に患者さんをご紹介ください。



統括診療部長  
木 村 五 郎

今年度から統括診療部長に就任した木村です。

これまでも、当院で内科医として主に呼吸器・アレルギー領域の診療に従事し、地域の患者様、医療・介護施設の皆様とも協力して診療にあたりてまいりました。

今後はさらに当院の診療全般についても、安全で満足いただける診療を、地域の皆様とともに考え、構築していきたいと考えています。

これまで当院の専門としてきた呼吸器・アレルギー、消化器、神経・筋疾患、重度心身障害などの領域以外にも、地域の皆様のご意見をとりいれながら、リハビリテーションを含めた高齢の方の諸疾患への対応などもさらに充実させていきたいと考えております。

当院の診療へのご意見、ご要望をお寄せいただければと存じます。

今後ともご指導をよろしくお願い申し上げます。



臨床研究部長  
坂 井 研 一

この4月より臨床研究部長に就任した坂井です。よろしくお願いいたします。専門は神経内科です。

さて国立病院機構は診療だけではなく、教育や研究にも力を注いでいます。南岡山医療センターは神経・筋疾患、呼吸器疾患、免疫異常、重度心身障害の患者さんを中心に診療・研究を行ってきています。研究や臨床の課題の発見と解決のためには、職員がより良い臨床研究を実行できるような体制を整えていく必要があると考えています。

また患者さんに安全で有効な治療の開発を行うためには治験への協力も必要です。治験に参加することは病院にとって財政的な補助になるだけでなく、我々の臨床にフィードバックされるものも多いです。

研究や治験の実施は患者さんの為になるだけでなく、職員にとっても仕事への理解を深め、モチベーションを高めると考えられます。それがひいては病院の評価を高め、安定した経営基盤の確立にも繋がると考えています。

# 職場紹介

## 1階病棟

1階病棟看護師長 岩本博子



1階病棟では、昨年の9月より地域包括ケアシステムを支える目的で、地域包括

ケア病棟の運用を開始しました。一般病床で急性期の治療後の経過観察や、リハビリの継続、自宅や施設からの入院で亜急性期病棟が適している場合、他院からのリハビリや緩和ケアを目的とした入院、レスパイト入院等を受け入れています。

今年度はプライマリナースが中心となり受け持ち患者様の看護に責任を持ち、個々のレベルアップと、退院支援に向けてチームワークを強化しています。受け持ち患者様へ、日々の笑顔での挨拶や声かけを大切に、患者様や患者様を支えておられる御家族の希望や目標を確認しながら看護を提供しています。またMSW、退院調整看護師、専従の理学療法士と連携し、早期よりカンファレンスを実施し、退院支援に関する問題と対策を検討し、安心して退院していただけるように調整しています。退院前にはケアマネージャーや、訪問看護師、在宅の受け入れ医院の看護師や、医師を含めたカンファレンスを行っています。カンファレンスの日程調整や、進行など看護師が主体でできるように頑張っています。

現在4階病棟の呼吸リハビリを目的とした入院の患者様が1階に転棟され、継続してリハビリを行い、退院指導を経て安心して退院していただけるように、呼吸リハビリの予定スケジュールに沿って継続した看護を開始しています。呼吸ケアチームが中心となり勉強会を開催し看護のレベルアップを図っています。

緩和ケアでは緩和ケア認定看護師を筆頭に、がんコアメンバーが中心となり、身体的痛みの緩和だけでなく、スピリチュアルに関する痛みへの看護を大切に患者様と向き合っています。

先日退院時アンケートより『花や緑に囲まれた自然環境の中で癒され回復でき感謝です。医療者の皆さんが柔和な表情で優しい声をかけてくださり和まされました。地域と連携した医療で適切に対応してくださいますから安心です。』という嬉しいお言葉をいただきました。一人でも多くの患者様から信頼され、満足され、またこの病棟に入院したいと思っただけのような看護を提供できるように努力してまいります。



## 都窪胸部疾患・地域連携懇話会を開催して

地域医療連携室 MSW 川端 宏輝

2015年末から始めた都窪胸部疾患・地域連携懇話会も1年が過ぎ、第5回を開催することができました。本懇話会は都窪医師会内の先生方との顔の見える連携の構築を目指して始まりましたが、今回も9医療機関12名の参加があり、この度は茶屋町在宅診療所の先生も新たに参加して下さり、いつもの相談症例検討をはじめ、病院・診療所の近況報告、当院の皮膚科の紹介、話題提供として認知症の治験の話など、様々な角度から話題を提供させていただき、盛会のうちに終えることができました。

今後とも引き続きこの会を開催する予定ですので、ご興味のある方並びに呼吸器疾患で相談したい症例をお持ちの方ご参加を心よりお待ちしております。

## はやしまふれあい講座に参加して

地域医療連携室 MSW 川端 宏輝

今回町民活動支援センター・NPO法人ふれあいネットはやしまのお声かけで、平成29年5月13日にゆるびの舎で「高齢者に多い疾患の対策と予防」という演題で、当院の院長の谷本 安が講師としてお話をさせていただきました。

週末の暑い昼下がりにも関わらずたくさん住民の方がご参加くださいました。

話の中では、脱水、食欲不振、フレイルやサルコペニアの早期発見など踏まえて、健康に生活していく上で、社会参加、運動、バランスのよい食事が大切であると伝えていました。住民からも食事やトレーニングなど質問もあり、住民の方々に何かお役に立てたのではないかと感じましたし、当院のことをしてもらおう良い機会になったのではないかと感じました。

今後も地域に何が貢献できるのかを模索しながら、頑張っていきたいと思いました。



## 絵画の寄贈について



平成29年5月25日に井本里香さんより絵画を寄贈していただきました。

井本さんは2002年に油彩画を始め、植物や山、自然を題材に数多くの作品を描かれており、この4月には岡山市の山陽新聞社さん太ギャラリーで個展を開催するなど精力的に活動されています。

寄贈していただいた絵画も、静かな湖面に力強く伸びた一本の木を写真的に描いたすばらしいものです。当院花明かりホールへ飾っておりますので、来院された際は是非ご覧になって下さい。



# えびす・だいにく100kmマラソン奮闘記

経営企画係長 後山 勝

2017年5月28日(日)島根県で開催された「えびす・だいにく100kmマラソン」(参加者1,600人)に南岡山医療センター・マラソン部にて出場して来ました。

このレースは、境港近くにある美保神社を早朝にスタートし島根半島を巡りながら、14時間以内にゴールの出雲大社を目指す自己責任・共走扶助の大会で「**自分の走りは自分で責任を持つ**」「**共に走る選手同士で助け合う**」という精神を元に企画され1994年から続く歴史ある全国的にも人気の大会です。

大会は個人の部とチームの部があり、個人の部で当職が参加し、チーム5人の部に平野第一診療部長、川端医療連携室長、田中経理係、山村医事係、邑久光明園の栗元会計課長(当院OB)が参加しました。

個人レースのウルトラマラソンは多々ありますが、このレースの面白いところは駅伝のように決まった区間だけを走るのではなく、チームで走者を何度も交代し仲間を助け合いながら100kmを走りきるチーム戦があるところです。仲間が走っている間に、残りの者は許可されている自分達の一台のサポート車でコースを先回りし、作戦で決めたポイント地点で走者交代しながら、たすきをつなぐといった概要です。

当日は深夜0時30分に南岡山医療センターを出発。現地には4時30分に到着。受付後、皆の無事のゴールを祈って三保神社にお参りました。そして個人の部5時30分、続いて6時30分に**チームの部のスタート**の号砲が切られました。当日の天候は快晴。気温も高く、早朝の港沿いの道を気持ちよく走っていたのもつかの間、すぐに日本海の山側に向きを変え北上、険しい登り道に入っていきます。

前半の50kmは海を横目に起伏に富んだチャレンジコース。アップダウンが続き、ランナーにとっては厳しい時間が続きますが、海岸沿いの一望できる景観は素晴らしく、つらさを



癒してくれます。そして前半最後の山場、島根原子力発電所のちょうど真裏の山をひたすら登っていきます。やっと頂上付近に着くと、そこからは物々しい原子力発電所もよく見え貴重な社会勉強にもなりました。

コースには約5km毎に地元の方々のご協力により給水所(エイド)が設けられ、飲み物やおにぎりやそうめん、果物等の「おもてなし」で手厚く迎えてくれます。時には名産のしじみ汁もあり、美味しくいただきかせてもらいました。

後半からは進路を松江方向に南下し、ほぼ平坦な道を走ります。70km付近で穴道湖が見えてくると、今度は湖沿いの道を西に向かって出雲市を目指します。

途中、沿道の方々や時には一般道を走る車の中からもたくさんの方々の激励の声「がんばれ!ナイスラン!」をいただき「あっざーす!(ありがとうございます)」と返すのが精一杯でしたが、本当にありがたく走る力になりました。

そして90km付近に到達すると走る体力も無くなり歩いていると、当院のチームの部の仲間達と合流。チームの部は3~5km毎にランナーを交代する作戦でここまでやってきました。「もう、走る脚がない。先に行ってくれ〜」と先行してもらい、気力だけでゴールを目指します。

そして残り1km。出雲大社付近に近づくと、チームの部の5人の仲間達が待っていてくれて、再び合流。出雲大社前では観光客の方々からも声援や拍手をいただきながら、ついに17時30分、**個人の部・チームの部の6人全員で100km走破のゴール!**

ゴール後は、かき氷をみんなでいただき、近くの温泉にて汗を流し、出雲大社へ感謝のお参り、そしてもう一つの目的である名物「出雲そば(割子そば)」を堪能しました。

最後に、長い道のりでしたが人の温もりをたくさん感じる素晴らしい大会であり、また大会の精神は普段の仕事等にもつながることを改めて実感するいい機会になりこれからの人生にも生かしていけるものと思います。

「島根の方々ありがとうございました!またいつの日か、この100kmの地に帰ってくるぞ!」あれ?私だけでしょうか(笑)



独立行政法人国立病院機構  
**南岡山医療センター**

〒701-0304 岡山県都窪郡早島町早島4066  
電話(086)482-1121(代表)  
F A X (086)482-3883  
<http://www.sokayama.jp/>

